

人間関係構築の視点から見た生徒指導の意義

提案者 真岡市立物部中学校 教諭

三 浦 渉

1 提案趣旨

本研究は学校現場における、生徒指導を人間関係の構築の視点で捉え、問題行動を未然に防ぐための人間関係を構築する手段を提案するものである。文部科学省が毎年実施している「児童生徒の問題行動・不登校生徒指導上の諸問題に関する調査」では問題行動を暴力行為、いじめ、不登校と3つに分けて調査しているが、それらすべてが増加傾向であることが分かる。それら3つの問題行動の原因や発端は、人間関係が正常に育まれていないものが多いと読み取ることができた。そのことから、教師と生徒の関わり方、生徒同士の関わり方、それぞれで望ましい人間関係の構築の仕方を学ぶことで、問題行動を減らせることができるのではないかと考えた。教師の学級運営に関わるリーダーシップ論、生徒同士の人間関係を構築する手段を提案し、それらが文部科学省の「生徒指導提要」における「成長を促す指導」、「予防的指導」につながることを期待したい。

2 提案内容

○ これから求められる生徒指導

栗原（2017 平成29年度児童・生徒指導推進中央研修会講演）は、これからの学習指導では、対人関係が改善するような仕掛けをもった学習方法が重要とし、生徒指導・教育相談は表1のような意識が求められているとしている。

表1 求められる生徒指導と教育相談（一部抜粋）

従 来	→	これから
事後対応的	→	計 画 的
課題解決的	→	予防的・能力開発的
個別対応	→	プログラム
教師中心	→	ピアの活用
※生徒指導と教育相談の実質的統合の必然性		

また、「子ども（個別）のニーズに応じて教師や大人が支えきる：三次的生徒指導」に比重をおいてきた生徒指導を、全ての子どもに必要な「自分で頑張る力を育てる：一次的生徒指導」、「互いに支え合い高め合う力を育てる：二次的生徒指導」を提供することで、三次的生徒指導を減らしていくことが期待できるとしている。

○ 未然防止のための教師の役割についての提案

文部科学省（2012）は、「児童生徒が安心できる、自己存在感や充実感を感じられる、そんな場所を提供できる授業づくりや集団づくりが、未然防止になる」と述べ、「居場所づくり」を推奨している。そうした“居場所づくり”に対して文部科学省（2012）は、「教職員に児童生徒のためにそうした“場づくり”を進めることであり、児童生徒はそれを享受する存在と言える。」としている。つまり未然防止は教師が主導で行っていく教育活動と述べている。

以下に教師のリーダー性が児童・生徒に及ぼす影響を考察する手だてとして、いくつかのリーダーシップに関係する知見を紹介する。

(1) リーダーシップ・スタイル

レヴィン及び、彼の指導でリピットとホワイトが行った実験で、リーダーシップのスタイルを、専制（独裁）型・民主型・放任型の3つに分類し、それぞれに従った集団の作業の結果及び、集団の性質を調べた。

表2 リーダーシップ・スタイルによる集団の作業結果及び集団の性質

専制（独裁）型	民主型	放任型
<ul style="list-style-type: none">・意思決定、作業手順もリーダーが指示を与えないと動かない。○短期的には他の類型よりも仕事量が多く、高い生産性を得る事が出来る。しかし、長期的には、メンバーが相互に反感や不信感を抱くようになり、効果的ではない。	<ul style="list-style-type: none">・リーダーの援助の下、集団で討議して方針を決定・作業の要領や手順は部下に委任○短期的には専制型リーダーシップより生産性が低いが、長期的には高い生産性をあげる。メンバー間に友好的な雰囲気生まれ、集団の団結度が高くなる。リーダー不在時も作業の効率が一番落ちない。	<ul style="list-style-type: none">・集団の行う行動にリーダーは関与しない・意思決定、作業手順も部下が決める。○組織のまとまりもなく、メンバーの士気も低く、仕事の量・質とも最も低い。

※INVENIO LEADERSHIP INSIGHT『レヴィンのリーダーシップ類型』を元に筆者が作成

この研究でリーダー役は訓練を受けて3種類のスタイルを演じ分けていた。この結果からリーダーシップ・スタイルは身につけることができ、個人で使い分けることが可能であるといえる。

(2) コンティンジェンシーモデル

集団状況によって効果的なリーダーシップが異なると示した理論を状況適応理論といい、その研究にフィードラーのコンティンジェンシーモデルがある。リーダータイプを「目的達成や課題解決を重視する生産性型」と「人間関係の良好を重視する人間関係型」の2つに分け、「部下との信頼関係」「生産性の構造（課題が具体的かどうか）」「リーダーの地位の力」に注目し、三つの要素の高低でチームのパフォーマンスの高低を調べたものである。

その結果は、生産性型のリーダーは、3つの要素の状況が良い、または悪いときにチームのパフォーマンスが高く、人間関係型のリーダーは3つの状況が中程度のときにパフォーマンスが高くなった。このことを学級に当てはめると、例えば、学級開きの4月には、指示が明確で、学級内のルールが明確である方が学級にとってはよく、1学期の終わりから2学期いっぱいあたりまでは人間関係重視の学級経営を行えば、3学期には指示が通りやすくなっているということも考えられる。

(3) PM理論

三隅が提唱した理論で、リーダーシップをP：Performance「目標達成能力」とM：Maintenance「集団維持能力」の2つの能力要素で構成されるとし、目標設定や計画立案、メンバーへの指示などにより目標を達成する能力（P）と、メンバー間の人間関係を良好に保ち、集団のまとまりを維持する能力（M）の2つの能力の大小によって、4つのリーダーシップタイプ（図1）を提示した。三隅・矢守（1989）によってこれらの4つのタイプと、学級に対する「学級連帯性」、「帰属度」、「学級の授業満足度・学習意欲」、「生活・授業態度」の4項目について関連を調べた結果が表3である。

図1 PM理論の類型

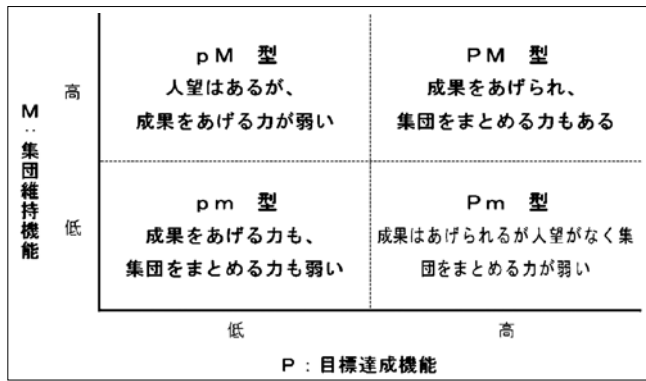


表3 PM理論 4つのリーダーシップ・タイプとの関連

学級連帯性：
PM型 > M型 > P型 > pm型

学級に対する帰属性：
PM型 > P型 > M型 > pm型

学級の授業満足度・学習意欲：
PM型 > M型 > P型 > pm型

生活・授業態度：
PM型 > P型 > M型 > pm型

これから、もっとも指導効果があるのはPM型である。田崎（1981）によると、PM型の教師から児童がどんな勢力資源を受けているか調べたところ、正当性、熟練性、親近性の順に強く付与されていることが分かっている。久保田（2020）は、「正当性は教師としての役割による力、熟練性は豊富な経験で得た力、親近性はインフォーマルな関係で形成された親密性をもとにした力、と考えると教師に必要な特性は、特定の人に備わった特性ではなく、研修で身につけられる力である。」と述べている。

○ 生徒同士の人間関係構築についての提案

先述の通り、これからは全ての子どもに必要な「自分で頑張る力を育てる：一次的生徒指導」、
「互いに支え合い高め合う力を育てる：二次的生徒指導」が重要度を増してくる。それらを達成するための方法をここで提案する。

(1) ソーシャルスキル・トレーニング (SST)

対人関係を円滑に築き維持するすべやコツを身につけるトレーニングである。スキル習得を目的としているため、人間関係の体験を目的とした構成的グループエンカウンターとは考え方が異なる。(諸富、2013)

①スキルを学ぶ意義と動機付けを図る「インストラクション」、②具体的なモデルを見せてコツを教えて行動を学ぶ「モデリング（観察学習）」、③学んだことを実際に行う「リハーサル（練習）」、④教師や級友からほめられたり修正を求められたりして改善し、意欲的に行動に取り入れていく「フィードバック」、⑤日常で自分の行動にしていく「定着」、この5つの流れを基本とする。

(2) ソーシャル・エモーショナル・ラーニング (SEL)

日本SEL推進協会によると、SELは「社会性・情動スキルの教育のことで、欧米諸国で実践されている自尊感情、対人関係能力の育成を目的とした教育アプローチ」である。米国のNPOであるCASELは、SELの教育アプローチでは「自己認知能力」「自己マネジメント能力」「他者理解能力」「関係性維持構築スキル」「責任ある意思決定能力」という5つの能力を養うことを目的だと定義している。日本におけるSEL実践は諸外国ほど多くないのが現状である。SELは複数回実施することによって、安定した効果が見込まれている。(山田、2020)

(3) ピア・サポート

中野・日野・森川（2002）によると、ピア・サポートとは、子どもたちの対人関係能力や自己表現能力等、社会に生きる力がきわめて不足している現状を改善するための学校教育活動の一環として、教師の指導・援助のもとに、子どもたち相互の人間関係を豊かにするため

の学習の場を各学校の実態に応じて設定し、そこで得た知識やスキルをもとに、仲間を思いやり、支える活動としている。問行調査によると、「いじめられた児童生徒の相談状況」のうち、「友人に相談」した割合は表5のようになる。

表5 いじめを友人に相談した割合

年度	小学校	中学校	高等学校	計
H21	8.2%	12.3%	16.4%	10.6%
H26	7.8%	10.9%	14.0%	9.1%
R01	5.8%	9.1%	15.2%	6.6%

この結果から、コミュニケーションツールが発達した時代なのに、いじめという深刻な悩みを同世代の友人に相談できない子どもが増えていることがわかる。

しかし、文部科学省（2019）は全国学力・学習状況調査報告書で、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」という問いに、約95%の児童・生徒が肯定的な回答をしている。これらの現状を鑑み、ピア・サポート活動を導入すれば、児童・生徒同士が相談することが可能な環境が生まれ、良好な人間関係が構築されることができるとは思えないかと考える。

(4) ジグソー法

ジグソー法は、児童・生徒の関わり合いの促進に友好的な学習方法である。主に、児童生徒達をいくつかのグループに分け、各グループに異なるヒントをあたえ、それぞれのヒントの理解を深める「エキスパート活動」、異なるヒント習得活動をした者同士でグループをつくり、それぞれの成果を持ち寄って話し合う「ジグソー活動」を行う。

①グループの中では、誰もが他者の助けなしでは良く学べない。②それぞれのメンバーは独自のそして不可欠な貢献をすることができる。これら2点の特徴から、1人の生徒が学ぶことが他の生徒の学びにつながっていく相互依存という関係が生まれるとしている。

3 成果と今後の課題

生徒指導とは、一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のことである。（文部科学省、2010）問題行動が起こった場合にその原因を追求し、改善していくような「子ども（個別）のニーズに応じて教師や大人が支えきる：三次的生徒指導」がメインではない。今回の研究では、さまざまな情報を取りまとめ、人間関係構築が重要視される生徒指導の必要性を提示し、それらに有効なリーダーシップ理論、実践方法の提案をした。豊かな人間関係が、「人格の完成」を目指すのに必要不可欠であることを忘れないようにしたい。

今後の課題は、実践して子どもたちへこの研究を還元することである。提案内容を実践し、児童・生徒が豊かな人間関係を構築する中でレジリエンスを高め、生きていく上での様々な問題の対処ができるように支援できて初めて達成と言える。生徒指導主事としてこの研究内容を活用できる場を積極的に開拓していきたい。